

「フラガール」成功の背景は —製作側のシビアな目と情熱—

東日本国際大学経済学部長 石井英朗

久しく私たちに忘れ去られていた日本固有のエネルギー資源＝石炭の命運に絡む明暗ふたつの事件が、昨秋から国民的関心となって展開した。いずれも、貿易自由化と石炭という固体燃料からより安価な石油という流体燃料への産業構造の転換という国際的文脈が、鉄の必然性をもって、産炭地という地域経済を直撃したことに起因している。

ひとつは、企業の再生をフラダンスショーと温泉に賭けたいわき市にある現・スパリゾートハワイアンズ誕生の苦節の秘話を描いた映画フラガールの圧倒的成功であり、いまひとつは、北海道第一の炭鉱都市であった夕張市の財政破綻である。

フラガールは、東宝や松竹といった製作・配給・興業という映画産業の3事業を垂直統合型に経営する大手とはまったく異なるシネカノンという独立系の小さな映画会社の作品として登場したため、当初大手系列の劇場チェーンでは上映されなかった。

しかし、日本映画製作者連盟から公表されたデータによると、ヒットの目安とされる興業収入10億円を超えて、58日間で動員数100万1千人、興業収入12億2千万円を記録している。いわき市においても、いわき駅前のミニシネコンで単館上映だが、すでに5万人弱の観客を集めており、最長のロングランをいまでも継続している。

そして、驚くなかれ、年が明けてみれば、2006年日本映画のビックタイトルをつぎつぎと獲得していったのである。

まずもっともながい伝統をもつ第61回毎日映画コンクールにおいて、日本映画優秀賞と劇中で見事なダンスをみせた蒼井優が女優助演賞、白取貢が録音賞を受賞した。大賞は西川美和監督の「ゆれる」

にゆずったが、日本映画大賞と優秀賞は、約 80 人の映画記者、評論家らの 1 次投票上位 5 作品を 2 次選考候補とし、新井満、桐野夏生、品田雄吉、吉田喜重、ドナルド・リリーの 5 人の選考委員が討議で決定したもので、フラガールは、「作品部門選考会では、評価を集めたが、その完全さが逆に足かせに」と『毎日新聞』（1 月 26 日夕刊）は伝えている。

ついで東京映画記者会による第 49 回ブルーリボン賞が決まり、作品賞にフラガール、主演女優賞に蒼井優、助演女優賞に富司純子が選ばれた（『毎日新聞』2 月 7 日夕刊）。

そして直近では、2 月 16 日の第 30 回日本アカデミー賞授賞式において、いずれも最優秀の冠のついた作品賞にフラガール、監督賞に李相日、脚本賞に李相日と羽原大介、助演女優賞に蒼井優と、フラガールは最大の栄誉に輝いたのであった。

この映画の成功を下支えしたいわき商工会議所を主体とした地元の市民組織の活動については、別稿を期待するとして、ここではその社会的背景について一考してみたい。

映画は何にもまして 20 世紀における大衆の視聴覚文化を代表するメジャー産業であった。しかし、テレビの圧倒的な普及とパソコンネットの急拡大などによって、基本的に興業収入に依存するメジャーの垂直統合型の産業支配構造が変様し、利害関心を役割分担する水平分業型にシフトする映画づくりが盛んになってきた。その代表的なビジネス形態が、製作資金を広く調達し、利益とリスクを分担する製作委員会方式である。

また昨今、巨大集客施設の不可欠条件ともなってきたシネコンと略称されている一施設に通常 6 スクリーン以上を設置した複合映画館が急増し、国内の映画のスクリーン数は昨年 11 月末で 3,021 と過当競争状態となっている。これは他面において、独立系でシネコン上映のチャンスを拡大していることに連動して、ヒット作を生む要因ともなっている。

韓流ブームの火付け役となり、フラガールを手掛けた李ボンウ社長のシネカノンは、劇場公開用 20 作品に投資し、興業収入や DVD 販売などで配当を目指す映画ファンドを昨年 4 月に設定し、証券会社を通じて一口 2 千万円で販売、個人投資家から約 46 億円を集めたという。フラガールの DVD は販売だけで 20 万枚を越えると予測されている。

李社長は1960年京都市生まれでフランスの名門ソルボンヌ大学にも2年間留学した映画館であるが、シネカノンを設立したのは89年である。『エコノミスト』の“問答有用”で「お客さんが入る映画がいい映画なんです。だから、本当にいい映画にするには、多くのお客さんに見てもらおう努力をしなければいけなかったんです」といい、映画でヒットを出す秘訣はとの問いに「経営者としてのシビアな目と、映画が好きだという情熱の両方が必要です」と応えている（2月6日号）。

映画が累積してきた裾野の広さと歴史的伝統に培われた人材やノウハウの蓄積は、現代のコンテンツ産業としても確かな地位を約束されている。若い世代のパワーが結実したフラガールの成功を手放しで喜ぶばかりでなく、この映画の感動の底に、エネルギー転換という歴史の重みがあることを再確認せねばならないであろう。夕張市の財政破綻も行政手法の拙劣に帰することはできないのである。